

辰巳会開催年月日及び場所

年月日	開催場所	時間	出席者人数	会費	摘要
35.10.7 11.2 12.2	金水金 神戸国際ホテル 大阪新大 阪神	11:00 A.M. 11:30 A.M. 11:30 A.M.	162 92 91	1,000 500 500	発会式 忘年会
36.1.12 4.3 6.2 10.2 12.4	木月金月 大阪北 神大阪 神大阪 神大阪	11:10 A.M. 11:00 A.M. 11:30 A.M. " "	100 130 76 76 109	500 1,500 500 500 500	東西合併 忘年会
37.1.22 4.2 7.2 9.13 12.4	月日月木火 神戸都 京大阪 神大阪 神大阪	10:00 A.M. 11:30 A.M. 5:00 P.M. 11:00 A.M.	67 305 74 133 122	800 1,500 800 1,300 1,000	大観月会
38.3.14 5.13 " " 9.18 12.5	木月 神戸有 馬 東三 大阪神	11:30 A.M. 3:00 P.M. " " 11:00 A.M. 5:00 P.M.	113 128 " " 89 63	700 3,000 2,000 5,000 4,000 800 1,500	泊当泊当 大 忘年会
39.2.27 5.6 9.21 11.18	木水月水 神戸 舞東 大阪	11:30 A.M. 10:30 A.M. 5:00 P.M. 11:00 A.M.	154 163 111 91	1,000 1,000 1,000 700	金子翁20周年祭 よね刀月法要 観忘年会
40.1.14 4.2 6.29 9.10 12.10	木木火金火 神戸神 神大阪 神大阪 神大阪	11:30 A.M. 10:30 A.M. 6:00 P.M. 10:00 A.M. 10:00 A.M.	118 66 85 27 79	1,000 600 1,500 800 1,000	新阪神合同受賞 祝忘年会
41.5.10 11.8	火火 京都神 神	11:00 A.M. 10:30 A.M.	175 72	1,500 1,000	大

収支表

41.6.1~41.11.30

収	入	金額	支	出	金額
前期繰越			たつみ第5号印刷諸費		232,262
現行預金	金	10,197	11/8例会費用		85,848
41/上期広告料	銀	206,221	旅費		32,850
神鋼、帝人、日商、太陽		600,000	賛助金関係印刷費		7,000
賛助金	高畑誠一氏 中井義雄氏 花井嘉夫氏 柳田彦次氏	50,000 3,000 3,000 3,000			
利息収入		6,338			
11/8例会費収入		70,000			
小計		951,756	小計		357,960
			次期へ繰越	現預金	71,237
					522,559
合計		951,756	合計		951,756

わが心の自叙伝(三) 終章

金子武蔵

寝坊をして食堂に行くと、戸口の階段のしたにオツアンがしょんぼりと立っている。わけをきくと、まだ食事をしていないという。外人の家庭ではシツケは厳格であるから、オツアンが遊びほうけて呼んでも食卓につかなかつたため、夫人は罰として朝食禁止令を出したのである。それではいっしょにという、ともにすわって食卓につき紅茶をガブガブ飲み、バターをやたらにつけてパンを幾枚となく食い、大ザラに取り立てのイチゴを盛り、砂糖と牛乳とをふんだんにかけて食った。兄さんとこの食事の方がよいと、オツアンは満足げであった。このオツアン、とんぼ返りを得意とする途方もないオテンバではあるが、母に似てドイツ人形そっくりのかわいい顔立ちで、スイセンのような清らかさをそなえている。一昨年ドイツに行ったとき、フランクフルトでもミュンヘンでもチュービゲンでも、ショーウインドーでよくオツアンそっくりの

姿に接した。やがて杉がきの外から、アマさんがしきりにオツアンを呼ぶ声がする。姿が見えないので、さすがに心配した夫人がアマさん呼びにこさせたのである。こんなにシュトレローの家の子供たちと親しくしたのは、山荘の無聊にもよるが、ひとつにはドイツ語を覚えるためであった。しかし、これは完全な誤算であった。二人とも多くの時をアマさんと過ごしているため、ドイツ語より日本語の方がはるかに巧みであるとき私が海を指しつ、ゼーとかメーアとかいうドイツ語を使ったら、オツアンはげんか顔をししながら、関西弁で「なにいうてケツカルカ」と応じたのだから、全くお話にならない。

子供を通じて次第にシュトレロー家とも親しくなった。夫の病気のために医者呼ぶ必要が生ずると、夫人はよく温室のなかにある玄関口にあられて、いかにもすまなそうに電話をかけてもらい

たいと申し出るが、そのときには必ずオツアンとボーイさんがあとにひかえていた。受話器は長身の夫人にとってあまりにも低いところがあるので、不恰好に身をかがめながら話すが、日本語はまことにたどたどしく「ありますありませんか」というのを「アンマス、アンマセン」という程度で見ると見かねてよく私や家人が代わってあげた。

夏は夕刻になると、門のところから、ウミ・ゲーエン(海に行こう)というオツアン、ボーイさんの大声がする。それを聞くと、私は二階東側の六畳での読書をやめて、シュトレロー家の海水浴に参加した。ただ病身なシュトレロー氏は欠席がちであった。ところで須磨浦といえども荒れることはあり、日によつては若者といえども、泳ぐのをちゅうちよするほど波立つこともあるが、そんな時でも夫人は「波あるよろし、風あるよろし」といって全く平然として、いつものようにきままた時間だけゆうゆうとして泳ぐのである。妹の常子などただボウ然として見ているだけである。

来客のあるごとに、お茶の会や夕食に招待してくださった。席上ではもう日本語を使つてはならな

いので、オツアンも、ボーイさんも平素の元気はなく、浮かぬ顔をしていて。夫妻のいうことは私にもどうにかわかりはするものの客人の話となるとサッパリであるが、オツアン、ボーイさんもじつは私と全く同様なのである。来客中の女性がピアノをかなでるとそれにこたえて夫人もひくが、これは義理にもじょうずとはいえない。オツアン、ボーイさんはおもてに怒りを発して、思わず禁令の日本語を使って「やかましい。ヤメ、ヤメ」と連呼するのであるが夫人は平然としてひきつづける。濃厚なシュトレロー氏はただニコニコしながら、この情景を見ているだけである。ピアノも終ると、夫人はよくアルバムを見せられた。生家、両親、兄弟と順々にくつて行くが、弟さんの顔には傷がある。ところが夫人はわざわざその傷に注意をうながしつづき誇らしげにこれがあるほどよいという意味のことをいったが、傷はドイツの大学生にありがちな決闘の傷であった。夫人はまことに元気のいいドイツの女性であった。

大正十四年にシュトレロー家が帰国するさい、私の弟妹たちも神戸の波止場まで見送った。オツアンとボーイさんとは五彩のテ

ーブルれ飛ぶ甲板から、例によつて元気のない大声をあげていたという。ただかんじんの私はすでに東大の哲学科に在学していたため見送つてあげることができなかったのは、今でもなお心残りである。もし今も生きておれば、オツアンは五十才近く、ボーイさんは四十五才ぐらいであろう。しかし、どんなに苦しいことがあっても、子供まで涙ひとつながすことのない、今でも一家のあつちのなかつた一家のあつちのなかつたボーイさんは第二次大戦に参加して戦死したかも知れない。

亡父より遺傳的な性格と学芸を尊ぶ家庭のふんいきとは、かつてはチューターでいまは在社にいる人たちのひそかな期待を裏切りつづ、私を次第に実業から遠ざけて思想や文化に心を寄せさせた。仏教や儒学への素質が私にないわけではないが、しかし一の谷山荘がもつエキゾチックな環境は、それらへのあこがれを育てるには適していないので、外国の文化や思想に関心をいだくことになるが、他家との交渉の少ない一の谷荘の生活において例外のひとつであるシュトレロー家との交わりはドイツの思想へと私を向けたひとつの機縁である。もうひとつはドイツ語の片山正雄先生である。

高等学校時代に感心した先生は少ないが、片山先生は例外の一人であった。他の先生の講読では一ページに必ずわかつたような、わからないような箇所が二、三のころのがつねであったが、先生の場合にはそういうことはなく、実にコンパクトであった。授業が進みすぎると、あてられるおそれがあるの

で、学生たちはよく先生にせがんで話をしてもらったが、先生はギターやシラーやケラーなどのほかにシュベングラーのことも話して下さった。当時『西欧の没落』はまだあまり知られていなかったが、先生の叙述は今にして思えばきわめて正確なものであった。このようにして次第に哲学科への進学を志すようになるが、大正十四年といえ、後に岳父となったところの京大の西田幾多郎はすでに『働らくものから見るものへ』に収めらるべき論文を発表しつつあって令名ようやく天下に高く、また和辻哲郎先生も当時は京大に職を奉じておられた。京大が三高にとっては隣家のようなものであるところからいっても、京大に入学するのが当然であるが、そこは他人みな西に向かえば、ひとり東に去り、独往邁進もつてみずなら快となすが変人のつねである。もし私が京大に入学しておれば、その

後いかなる運命をたどったか、知るよしもない。

親族の存在は子供の精神的成長にとつても意義をもっている。幼いころには人生に対する態度はほとんど全く両親によつてきめられているが、これはおのずと限られている。しかるに時折りオッサンやオバサンに家に寝泊りすることができるならば、自分の家庭とは別の生きかた、見かたに触れることになるから、人生の多面性に対する目が開かれるのである。ただ親族が相互の基本的平等をもっていることが必要で、そうでないと見方を変えさせる効果はない。

隣人も親族に準ずる意義をもつが、この場合にも基本的平等という条件のみたされることが必要であらう。

「故郷喪失」という点だけでは現代人としてあえて人後におちな私にも故郷に準ずるものがないわけではない。しいていえば、それは須磨である。しかし両親は中年になってから移り住んだのであるから、須磨には、そうして神戸にも一軒の親戚をももつていなかった。それに谷間の家でも山荘でも隣人とのつきあいはほとんどなかった。もっとも山荘の場合にはシュトレロー家がおり、これと

別の意をこめたものであったが、はからずもこの日は、両家が年来の祝福に訣別した斜陽のうたげでもあったのである。というのは、大正十二年といえ、柱石たる父の敗色ようやく濃く、この日以後には両家のかかる団圓はたえてなかつたからである。

昭和七年のころ、家内との婚約ととのつたおり、両親ともにお家さんにあいさつするよう珍しく、またしつこく要求したので、やむなく私はもう八十才過ぎておられたお家さんを塩屋の山手の侘住まいにおたずねした。たどたどしく口上をのべると、お家さんはちょっと顔色をかえられたかのようであったが、それも一瞬のことで、やがて平素の明晰な語調にかえりありがたいお言葉を賜わった。教授会で質問攻めにあうとヘドモドする私などはちがいが、お家さんは八十才過ぎてもあたまの切り替えの早いお方であった。

父は終生鈴木家の番頭たるにどまらなかつた。不肖の子にも、その意志するところの一端はわかつている。長女の生まれたときには、祖母にあやかるよう「たみ」と命名したが次女のときには「スズ」と命名したのは、幼時より御家族同様の処遇を承つた恩を銘記する

ためには不眠不休の努力をしなくてはならないものであるという事実を知った。それで高知市への転学はたしかに当をえたものではあつたが、しかし親族間の基本的平等という条件に欠けていたし、また手おくれの感が深い。けだし人間の性格といふか価値感といふかともかくそのようなものはほほ十才ごろにはすでに確定し、あとはその線に沿つての主として知的成長であるのに、高知に転学したとき、私はもう十二才に達していたのである。中学二年のころに中村正直の編『西国立志篇』でよんだスマイルズ『セルフ・ヘルプ』に影響されて、せっかくながわがわが自分で断わってしまったことを思い出しても、性格がすでにきまつても、手おくれであつたという感が深いのである。

あり、また同様の目的のために姫路や、有馬へのマツタケ狩りが催されたが、私はそのようなときいつも御家族同様の待遇を受けた。一の谷時代となると、岩治郎氏御夫妻は塩屋の海辺に住んでおられたが、春夏の休暇にはよく招かれてお宅に泊めていただいたことがある。昼はご主人のペラ釣りの舟におともをし、私はお子さんがたとカルタやすごろくに興じて楽しく数日を過ごさせていたのだが、このようなき「御察人はん」すなわち薄幸の佳人兎三夫人はゴンタに対しても慈母にひとしき愛情を寄せられたのである。

その後、鈴木家の本邸は大手に建てられたが、大正十二年のころでもあつたであろうか、ある日、お家さんはお孫さんたちをつれて一の谷山荘に來訪せられた。私は当時の高校生にありがちな霜降り洋服にゲタバきという姿を母にとがめられながら、それでも弟、姉たちと共に母にしたがって、この日ばかりは遠くから呼びかけるオッサンとボーイさんにも応えずに、屋敷のうちをくまなく案内して回った。例の埋め立てた土地およびそのカミテの段地に赤々と熟したイチゴはお家さんを始め御一家のお気に召したらしくおみや

明治とちがい大正は花やかさをたたえた世であつた。イチゴ畑における、また白く咲き誇りむせるようなおいをただよわせるバラだなのもとにおけるそうして女流作家源氏の語をかりるならば「げにその匂さはなやかに立添える」バラだなのもとにおける、また泰山木の花かおる石のきざはしにおける緑なすカーベットを繰りひろげるローンにおける、外人の残した強烈な色彩の花咲き乱れる園における両家女人の

ためであつた。有名なマルチン・ルター之父はハンスといつた。いまは東独に属しているチュリンゲンのメーラ地方の農家に成人したが、少々粗暴でも誠実で勤勉で、そうしてまた有能でもあつたが、この地方には末子相続の慣習が行なわれていて土地をもつことができず、おの志をのべることもできなかった。青雲の志やみがたく新しい生活を開拓すべく新妻のマガレエテをつれて家郷を出て、マンズフェルトの町へと旅立った。いったい、若い人のすることは、知らず知らずのうちに、全般的状況に左右されているのがつねであるが、この場合もまた同様である。一四

途中アイスレーベンにおいて新妻は長子マルチンを産んだが、マンズフェルトではハンスは最初は銅山に鉱夫として働らいた。しかし明敏で勤勉で質素な彼は次第に立身していった、息子が八才になつた一四九一年には、マンズフェルト伯から浴釜を借り受けて自分で銅の精練事業を経営する産業家となり、町を代表して伯家との交渉にあたる四人衆の一人にあげられ、また大通りに自分の邸宅をかまえるようになっていた。さらに一五〇一年には、息子を当時名

の交渉が私にドイツ思想へのあこがれをいだかせる機縁とはなりはしたが、なにぶんにも相手は外人であるから、交渉はそう内面にまで及ぶことができなかったばかりでなく、すでに価値観のさだまつた成年期のものであつた。

要するに谷間の家も山荘も隱棲には適しても子供の教育には有益な環境ではなかつた。父が兄を小学一年のとき、私を六年のとき、それぞれ高知に転学させたのは、むろんいろいろな理由によるであろうが、ひとつにはこのような欠陥に気づいたからであらう。高知市に移つてから最初の二年あまりを中島町一丁目の借家で兄や亡妹常子と共にすごしたが、これによつて、私は旧幕時代の下級武士の屋敷がどのようなものであるかを知り、また城下町全体の生活にも身をもつて触れることができたし、父の弟の楠馬さん、母のサトである傍士家、母の姉がとつていた西郊朝倉村の西本家に時折り寝泊まりすることによつて、カラツヤさんの生活、お百姓さんの生活の实情に接することができた。とくにホテル狩りに行つて泊まつた西本家では、農家なるものは日常生活のために買物らしいことをほとんどしないが、しかし養蚕の

途次アイスレーベンにおいて新妻は長子マルチンを産んだが、マンズフェルトではハンスは最初は銅山に鉱夫として働らいた。しかし明敏で勤勉で質素な彼は次第に立身していった、息子が八才になつた一四九一年には、マンズフェルト伯から浴釜を借り受けて自分で銅の精練事業を経営する産業家となり、町を代表して伯家との交渉にあたる四人衆の一人にあげられ、また大通りに自分の邸宅をかまえるようになっていた。さらに一五〇一年には、息子を当時名

最も恵まれたものであつた。それで父のハンスはさらに大学院の法学部に進学することを命じたが、従順な息子はこれに従つた。しかし入学して二カ月少したつと、意外にもこの息子は突如としてエルフルトの修道院にはいり、父の激

が、しかし御一家はもとの四丁目に住んでおられた。二の谷時代に私はよくこの「御本家」に遊びに行つた。格子づくりの二階建てのこの家にはいとすず帳場がありかつてはここに端座するよね子刀自すなわち「お家さん」に父は番頭の一人としてつかえていたわけであるが、しかし私の遊びに行つたころには、お家さんはもう奥の間で生活しておられた。

怒を買った。ハンスは自分では坊主そっくりの生活をしながら、それでいて坊主が大きいであつた。彼はキリスト教の道徳的方面に対してはきわめて忠実ではあつたが、儀式めいたことは一切きらいで、キリスト教を実践する場合は教会や修道院ではなくして、むしろ家庭であり仕事場であると信じていた。そして「働らかざるもの、食らうべからず」ということをもって無上の金言と解していたのであるが、しかるに坊主は十分の一税とかなんとかインチキ手段を弄して信者から財をまきあげて働らくことなく食らうものであるがゆえに、世にこれほどイヤなものはないというわけであつた。しかるにせつかく一流の大学に入学させ、しかも成績抜群で将来を期待していた息子がともあろうに坊主の軍門にくだつたのであるから、このがんこオヤジ、カンカンになっておこるのである。



金子直吉翁掛軸

司祭に叙任されることになつた。これを聞くと、ハンスはがんこオヤジのつねとして、息子に対する愛情もだしがたく、叙任式に参列すべく儉約の鉄則を破つて、二十人の騎馬武者をたがえて修道院に至り、わが子の行く末に幸あれかしと大枚二十グルデンを寄付した。いま牛一頭がいくらするかは世外の私にはわからないが、当時一グルデンで一頭を買うこともできたさうであるから、とにかく相当の大金であつたに相違ない。しかし、このオヤジ、わが子のかわいさにそうしただけであつて、根っからの坊主ざらいとときている。だから荘厳な式のあいだこそおとなしくしていたが、やがて設けられた歓談の席上で、修道院生活のありがたさを説教する坊さんたちにくつてかかつて激論をはじめ、あげくのはてには、ワシの息子が修道院にはいったのは、お前たち悪魔のたぶらかしによることであると放言し、憤然として席をけつて立ち去つた。よほどがんであつた見え、死の床についても坊さんの厄介になることを断じて許さなかつたといわれる。なかなか面白いオヤジである。

息子は父とは全然ちがつた道を歩むことになつたが、しかしやはり父の道にかへつたとも見ることが出来る。中世では修道院にはいってめい想願に耽ることが至上の生活であると考えられていたがしかしこれは町人や市民にはできない相談であつた。貴族のみのできることであつた。修道院入りは膨大なる領地を伴つてなされた例は史上いくらかもある。ところで息子のマルチンは修道院のなかで思索しているうちに、ついにはだれでも自分の職業に刻苦精励するものは、働らく神の働らく道具となつて現実のうちに働らくものであるから、それがそのまま神に対する奉仕であると考えられるに至つた。ある職業についていることは神によつてそれに召され、それを執行するよう命ぜられていることであるという意味において、職業に召命 Beseel Calling の意義を与えたわけである。彼の説教によつて中世では修道院のうちに限られていた禁欲が世間の職業的日常生活のうちに浸透することになる。かくして町人の宗教、市民の

宗教が思意的に確立せられるが、宗教改革の事業の意義もまたここに存するとすれば、息子もやはり父の道にかへつたことになるのである。

は、私もまだこれを十分突きとめていないが、しかし自分の仕事に精進し夢中になることからきている点だけは確実であると思う。今後も父にあやかり、最後まで自分の「召命」に働らきつづけたいと望んでいる。「タケゾウ、もうよい。こちらへ、こい」という声のかかるまでは。

ただいたずらに多くの書を読みまた生活に窮しているんな事を書き、長年にわたつて講義もしてきしたが、今やすでにその大半を忘れてつたようである。しかし感銘深く胸裏にとどまつているものがないわけではなく、ルター父子のことなどはその一例である。マルチンの伝記や著作を、そうしてまた有名なウェーバーの「プロテスタントの倫理」などをくり返し読んでひもとくと異常な興味をそそられるが、それはハンスには亡父のようにつねに私の身辺にあつて導いてくれるかのごとくに感ずるからである。

金子家御慶事

去る十二月七日橋本隆正氏の御媒酌に依り金子直吉氏令孫金子直通氏(文蔵氏長男)と楠瀬正一氏令孫(八田知博氏長女)八田芳子嬢と宝塚ホテルに於いて華燭の典を挙げられ盛大なる披露宴を催された。

氏名をあげないと、十分に意をつかさぬこともあるが、御存命の方々の場合には、おのずと支障も予想されるので、特別の場合を除いて、明記しないことにした。

鈴木商店大阪支店のある日

大正十四年九月一日撮影



- ・後列 清水兎喜雄 河村 保 武政 山崎 勝吉 石塚 正文 中村
- ・前列 下元 健吉 大島理一郎 土橋 英明 上村 政吉 五島 安蔵 柳田 義一

編集室から

幕末の志士坂本竜馬は「恋なる題名に隠れて切々憂国を歌にした」「みじか夜をあかずも啼いてあかしつる心語るな山ほととぎす」と同じ志士でも平野次郎国臣は「わが胸の燃ゆる思いにくらぶれば煙は淡し桜島やま」と真正面から赤心を歌つた。禁門の変で亡くなつた久坂玄瑞は竜馬よりもずっと砕けて「鴨川の浅いところと人には見せてわたしや千鳥で啼き明かす」とわが国志士の愛国歌は数うれば限りがない。竜馬の踊るような名筆蹟の中にこれは亦「大姉さま」として郷里の姉に宛てた三メートルに近い手紙が書かれてある。「われら数藩のものを合わせて姦吏を殺し世の中を、せんだくいたす所存に候。竜馬の生命等心配あるまじく、もともと土佐のイモホリの子死んだとてたいしたことは御座無く候えども、この男煮ても焼いても中々死なぬようですから心配御無用云々」と冗談が交っているが「世の中のせんだく」という表現に血涙が滲んで見える。

今回編集子が西川玉之助先生から預かつた韓国人安重根の絶筆を韓政府に奉呈したる時、わが維新志士の心境を一層強く追憶、思い浮かべては虫鳴く夜の更けゆくことを忘れた。

原稿募集

内容 随想、詩、和歌、俳句、絵写真等  
用紙 原稿用紙、四百字詰四枚程度  
締切り 昭和四十二年三月末日  
送り先 神戸市生田区三宮町一丁目三神ビル五階  
太陽鉱工KK分室  
たつみ編集部 宛

たつみ 第六号

昭和41年12月1日発行  
編集者 柳田 義一  
発行人 辰巳 会 本部  
神戸市生田区京町72  
太陽鉱工株式会社内  
電話 3281  
分室 2254  
印刷所 岡部証券株式会社